

ペルーから一時帰国した 子連れママに聞いた話

柴田 幹雄 陸自75

年末年始にペルーの日系企業勤務のある日本人家族が、ペルーでは中国製とロシア製のワクチンしかないからと、小学生の女の子3人引き連れて接種のため帰国してきた。このご夫婦は2人ともスペイン語専攻で、結婚してすぐメキシコ赴任、その後コスタリカ、コロンビアなどで勤務し、現在はペルーの首都リマに住んでいる。奥様のSさんと家内が親しくしており、Sさんから楽しい話を聞いた。雑談ながら聞いた話だからまとまりのない断片的なものではあるけれど、あまりなじみのない南米の様子を垣間見てみましょう。

私(Sさん)は2度目のメキシコからペルーに引越して5年だけど、今の大統領、カステイジョになって社会不安が大きくなった。彼は21年にケイコ・フジモリ候補を僅差で破って当選したが、80年代に猛威を振るったテロ集団のセンデロ・ルミ

ノソ(輝ける道)に通ずる極左の路線を踏襲するように思われている。現に銀行を凍結して金を貧乏人に配るなどをしているから、1980年代から90年代の極左テロの恐怖を覚えていた人はテロにおびえて米国に移住する人もいる。私の知り合いの旦那さんは日本食レストランのオーナーだったけど、政治の先行き不安で店を手放すかどうかで夫婦の喧嘩が絶えず、奥さんと子供は日本へ帰ることを決めた。結局旦那さんも、妻や娘がいなくて稼いでも意味がないと、あきらめて日本へ帰ることにしたという。政治で直接国民の生活が激変するなど日本では考えられない。

ペルーはスペイン領から1821年に独立するが、ペルー生まれのスペイン人が、スペイン本国の支配を嫌って独立したのであって、インカ帝国の末裔が植民地から脱して独立したのではない。米国と同じような事情での独立であり、東南アジアが戦後欧米から独立した状況とは違う。

統計では欧州系が15%、メステイノと呼ばれる混血が45%、先住民37%そしてアジア系などその他

が3%である。そしていまだに欧州系つまり白人が上流階級として存在している。私の夫の取引先の現地企業の社長の多くは白人で、もちろんスペイン語をきれいに話す。ある社長夫人の母語はスペイン語で、フランス語の学校へ行き、大学時代は米留學をしていたという。

コロンビアにいたとき私が出産したのはコロンビアでは超一流産婦人科病院で、担当医は40歳くらいの男性だった。もちろん白人でスペイン系の名前。コロンビアの私立医大を卒業した後、ドイツへ留學しそこで奥さんを見初めて結婚し連れて帰ってきた。だからその子供は当然完全な欧州系の顔立ちをしている。その先生に小児科の先生を紹介してもらった。小児科先生は私がお世話になった産婦人科医の医大同級生で、小児科病棟の副医長だった。その奥さんが妊娠した時は同級生の産婦人科医が担当していた。お産もそこでしたのか聞いたら違うという。その小児科医の奥さんは米国へ行って出産した。米国の保険に入っていないければ数千万円かかると思う。もし米

必要でしょう。なぜそうするかという、米国で生まれるとコロンビア国籍と同時に米国籍がもらえるから。米国籍はお金では買えない価値がある。コロンビアは麻薬カルテルと美女の国くらいに思われていて、コロンビアのパスポートでは米国へ入国さえ難しい。米国は頑張つて勉強し努力をすれば報われる国だがコロンビアはそうではない。そこに米国籍の重さがあるけれど、恵まれている日本人には理解しがたいでしょう。日本国パスポートのすごさもわからない。南米のお金持ちは何もフェラーリを買うだけでなくそういうことにお金を使う。

私の家はペルーでは中流の上くらいかなと思う。リマ市に住んで家賃は1カ月1300ドルくらい、各家庭はSUVを2台くらい持っている。日本車、ドイツ車のアウディ、BMWが多い。

本当のお金持ち、さつき言ったような上流階級の家はゲート付きの敷地内で、車は5〜6台、それもこだわりの車ばかり持っている。もちろん大きなSUVもあり後部に牽引フックがある。多分4輪バギーとかボートとかをトレーラーに載せて牽

引していくためだと思う。そういう家は子供たちをインターナショナルスクールに入れる。学費は月に最低1000ドル位で、年会費や教材料、研修費などお金を取られるから子供が複数いればかなりの出費になる。

ペルー国民の平均月収は500ドル弱かと思う。広場の露店でインカの民芸品を売っている人など低所得と思われるけど、それでも民芸品を入手して売るといふビジネスをし、貨幣経済の中に入っている。

コロナワクチンは70%くらいが打っているが、30%の人はワクチンを打たない。ワクチンより村のシャーマン(祈祷師)に祈ってもらったほうが効くと信じている人が大勢いて接種率は上がらない。ペルーはアマゾン川上流域を含むジャングルも広大で、先住民集落もある。そこで自給自足の生活をしている。スペイン語が話せて外へ出る勇氣のある人だけは都会へ出てくるが多くはジャングルで一生活を過ごす。

日本から有名な芸人とテレビクルーがペルーに来て、ジャングル内の村を取材した番組をペルーで見ただ。その番組内で、村のおばちゃん

そこない正確な蛇の種類は分からなかったが、日本の取材クルーはとにかく病院へ行こう、車を出すからと大騒ぎになった。しかしそのおばちゃんは「いいえ、私はここにいます」と言つて動かなかった。病院へ行くにせよ半日かかる。蛇の種類も定か

でなく血清もあるかわからない。車で走り出しても間に合わないだろう。番組内ではその後どうなったかは放映されなかった。私はその人は死んだと思う。蛇にかまれたらそこ

メージがある。国の運営がうまくいっていないのだから国立病院も

引き落としが1日できなかつたからと水道を止められそうになつた。ふ

きはカードやオンラインで人の手を

ペルーでは携帯の電池交換など見

家で一定額例えば1000ドル

らしい現金をおいておくこと。強盗に入られたらとりあえず1000ドル出してお引き取り願う。金がなければ怒った強盗に何をされるかわからない。普段歩く時はある程度の札束を輪ゴムで止めて持ち歩く。朝出勤時に、この札束も必ず確認してポケットに入れる。私の旦那はカーナビが普及する前に、道端へ車を止めて地図を見ていたらバイクに乗った男に拳銃を突き付けられ金と腕時計を渡した。男は旦那の車のキーを取って後部座席に放り込みバイクで逃げたということもあった。

女性はATMで金を下ろして歩いていると襲われる。女性は金を持つと危ないのでペルーでもメキシコでも一般に旦那が家計を握る。女性は危なくてカードも持ち歩けない。もちろんカードには引きおろし制限があり例えば1日300ドルまでとかになつてゐる。そうすると強盗は24時直前に襲い300ドルおろさせ日付が変わつた瞬間にもう一回おろさせて計600ドルをせしめる。深夜は要注意である。

以前まだ南米になれない頃メキシコで走っているタクシーを止めて乗ったらその運転手から「お嬢さん、

通りで流しのタクシーなんか捕まえたら危ないからダメだ。必ず信用できるタクシー会社に電話してタクシーを呼びなさい」と注意された。

話をしていたらなんだか格差の話になつてしまった。ペルーでは日本語のテレビはNHKだけで、それしか見ていない日系人の中には「日本は経済発展もせず、コロンはひどくおまけに貧富の差が広がり格差社会になつたらしい。もう日本へは帰れない」と嘆いている人もいた。何を基準にNHKは日本を格差社会とつか知らないけど、ペルーを基準に格差がひどいと思えば失望するだろうね。

ペルーの犯罪の話もしたけど日本以外はどの国も似たようなものだし、観光客も大勢来ている。ペルーはインカ帝国の遺跡や、マチュピチュ、スペイン時代の瀟洒な建物そしてナスカ地上絵など観光資源は豊富などころ。自然も文化も多様性に富んでいる。親日的だし、人も一度信用できると思えばアミーゴになり本当に助け合う人情もある。一度訪問したらきつとペルーを好きになれると思う。